

特集：カナダ合同教会アーカイブズ資料より

緊迫する国際情勢下の コーテス書簡（1925-1941年）を読む

パトリシア・スイッペル

2017年3月筆者は「カナダ・メソジスト婦人宣教師の研究」（石津珠子教授代表）に関する共同研究のために、トロントにあるカナダ合同教会アーカイブズを訪問した。目的は婦人ミッション（WMS）より発行された年報の複写であり、新たに形成されたカナダ合同教会にWMSが加わった1925年から、独立した組織としての機能を停止した1962年までを扱った。これらの史料を調査する一方で偶然、「コーテス書簡」と記されたファイルが目にとまった。それはWMSの宣教師として長く日本で活動したシビル・ルディーナ・コーテス（Sybil Ruthena Courtice 1884-1980）により書かれ、また彼女に宛てて書かれた書簡で構成されていた。

ミス・コーテスとは？

コーテスは1884年に現在のオンタリオ州セントラル・ヒューロンの一部であるポーターズ・ヒルの熱心なメソジストの家庭に生まれた。奇しくも東洋英和女学校と同年の誕生であった。オンタリオ州のロンドン音楽院とトロントのメソジスト・チャーチ・トレーニングスクールを卒業し、WMSの宣教師として認められていった。1910年に日本に到着した時、彼女は26歳であった。1911年にコーテスは、当時イサベラ・ブラックモア（Isabella Blackmore）が校長を務めていた東洋英和女学校の音楽教師となった。翌年、同校の商議員会（Board of Directors）の一員となった。コーテスは1913年にオンタリオ州クリントンに帰国した。1917年、今度は静岡伝道部をその拠点とし、日本での活動を再開した。1923年から2年間の賜暇休暇の後、彼女は静岡伝道部において主事と会計として、バイブルウーマンの指導と教会幼稚園を担当した。1928年に彼女は日本でのWMSミッション全体の会計と運営の仕事のために東京に戻り、麻布に拠

点を置いた。この時から2度の賜暇休暇を除き、コーテスは1943年に戦時交換船で日本を離れるその日まで、自身の仕事を全うした。こうして彼女は戦時下に日本を去った最後のカナダ人宣教師となったが、その3年後には戦後の復興のために日本に戻った女性では最初のカナダ人宣教師となった。

コーテス書簡概要

カナダ合同教会アーカイブズのコーテスの書簡はアクセス番号813.058cの中の二つの箱にあり、ボックス73には、1925年から1961年まで日本のWMSミッションとトロントの本部との間で交換された書簡、電報が含まれている。ボックス74は1926年から1954年まで日本のWMSと本部で交わされた会計関係の書簡で構成されている。筆者はボックス73より、1925年から太平洋戦争が勃発する直前の1941年までの約260点の史料を複写することができた。そこには、コーテス自身が書いた106点ほどの書簡も含まれていた。

コーテスの書簡は規則的なパターンを有している。毎年同じような日程で同じような項目に関する記載がされていた。毎年始めに開催され



シビル・コーテス
(1884-1980)

ている日本のWMS宣教師協議会に続いて、会議の翌年の予算請求の承認事項や人事決定などをトロントの本部に送っていた。続く書簡は、新しい予算項目または増額された項目について、さらなる説明を行っていた。1年が進むにつれてコーテスの書簡には、宣教報告、宣教師の到着と帰国、休暇の計画、給料、健康の問題などが記されていった。夏期にはあまり書かれなかったが、9月は勤務の再開に伴い、やり取り

シビル・コーテス年表

1884年	カナダ・オンタリオ州ポーターズ・ヒル生まれ
1905年	ロンドン音楽院 (London Conservatory of Music オンタリオ州) 卒業
1910年	メソジストチャーチトレーニングスクール (Methodist Church Training School トロント) を卒業し、来日。長野にて日本語習得
1911-1913年	東洋英和女学校に就任 (担当: 音楽)
1913-1917年	帰国 (オンタリオ州クリントン滞在)
1917-1923年	静岡伝道部 勤務
1923-1925年	賜暇休暇
1925-1928年	静岡伝道部 (担当: 伝道、会計)
1928-1931年	(在日) カナダ合同教会婦人ミッション総主事。麻布に拠点を置く
1931-1932年	賜暇休暇
1932-1939年	(在日) カナダ合同教会婦人ミッション総主事
1939-1940年	賜暇休暇
1940-1943年	(在日) カナダ合同教会婦人ミッション総主事
1934-1941年	東洋英和女学校理事
1942年	敵国人として収容所に入る
1943年	戦時交換船にて帰国
1946-1949年	再来日 カナダ婦人ミッション総主事
1946-1950年	東洋英和女学院理事
1949年	帰国
1980年	バンクーバーにて逝去 (95歳)

出典: *『カナダ婦人宣教師物語』(東洋英和女学院、2010年)

* *Forty-Third Annual Report of the Woman's Missionary Society of the Methodist Church, Canada, 1923-24*

* コーテス履歴書 東洋英和女学院史料室所蔵

も活発になった。コーテスの書簡はいつも丁寧で正確で対応がしっかりとしていた。全ての手紙は、受け取った手紙と与えられた許可に対する感謝から始まっていた。この後に、否決された要求や古い要求の繰り返し、または新しい要求の詳細な説明が続いた。

テーマⅠ. 一資金の確保一

コーテスの尽力によるヴォーリズ校舎建築、財団法人化

コーテスの書簡では少なくとも三つの重要なテーマが浮かび上がる。ひとつめに、日本における宣教活動への財政基盤を確保するためのコーテスの努力が挙げられる。1930年代前半の世界規模の不況はカナダでの資金調達を困難にしたが、これはちょうど、日本におけるWMSの活動が最も活発になった時期と重なった。コーテスは不況に苦しむカナダでの資金調達の困難さを十分に理解していた。宣教師の給与削減など色々な節約を喜んで受け入れ、そして円安をうまく利用できるような手段を探した。しかし、日本での宣教にどうしても必要だと考えた資金については、要求することを止めはしなかった。

日本在駐のWMSにとって、1930年代の最も大きな財政的事業は、学生寮と外国人宣教師の住居、幼稚園と伝道館を含む新たな校舎群の建築という東洋英和女学校待望の計画であった。トロントの本部はすでに建築計画については承認したが、費用については憂慮した。そのためコーテスは丁寧に詳細を記して返信をした。1930年5月彼女は、最近横浜に建てられたフェリス和英女学校より東洋英和の建物の計画は安価であり、1923年の関東大震災の後に急いで建てられた青山学院の建物よりはもっと高価であると本部に報告した。1931年2月には、3階建ての学生寮は鉄筋コンクリートで建てなければならないという東京府の規制による追加の費用について説明している。1932年9月15日のコーテスの書簡によると、賜暇休暇の後、彼女が東京に帰ると、新たに

「快適で、便利で、美しい」外国人宣教師の住宅が彼女を待っていた。

(以後、コーテス書簡からの引用は青字で示す)

校舎建設のための資金が確保されたことで、コーテスは、東洋英和の次なる急務を再開した。財団法人として認可されるためには、30,000円の基本財産が必要であった。1932年12月9日には少し待ちきれず、

「この問題は、そちら〔本部〕が一昨年と

昨年に規約を承認した際に詳しく説明した
ものです。・・・私たちはできるだけ早く
財団法人としての認可を手に入れなければ
なりません」

と記されていた。1933年3月に、本部で必要な
資金を提供する提案が承認されたという連絡を
受け、コーテスは資金の寄付を

「贈り物であった新しい校舎に、さらに輝
かしい仕上げが施されました」

と溢れんばかりの感謝を表わして返信した。彼
女は5月25日の内々の開校式、その後の卒業生
や友人が計画している「特別なバザー」、夏の
間に徐々に始める引越しについても伝えた。

1934年の1年間を通して書かれた書簡には、
WMSの実績である東洋英和女学校に対する
コーテスの誇りが特に反映されていた。財団法人
となって最初に開かれた5月31日の理事会で、
コーテスは新しい組織となったことを宣言した。
彼女と東洋英和女学校の校長であるF. ガート
ロード・ハミルトン (F. Gertrude Hamilton)
は理事となった。6月24日には、

「私たちの『麻布の学校』は現在、財団法
人東洋英和女学校であります」

と誇らしげに報告されている。

11月が近づくとも東洋英和女学校50周年記念祝
賀会の詳細な計画を送り、祝賀行事が終了する
と11月17日に

「私たちにあって、とても満足した週にな
りました」

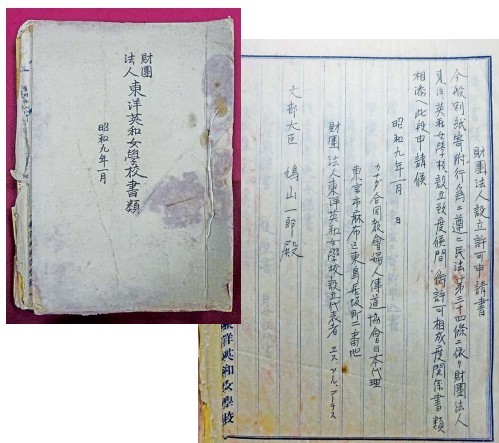
と報告をしている。

コーテスがカナダの本部に要求した財政的な
支援は他にもあった。1933年2月、彼女は若者
の成長を支援するため、野尻キャンプ場を購入
するための資金の約束を確保した。1934年10月、
コーテスは、日本にあるWMSの資金を上田教
会の新たな敷地の購入の補助に使用する許可を
得た。そして1934年から、彼女は静岡英和と山
梨英和の財団法人の申請に必要な資金を得るた
めに活動した。

1930年代の経済不況下にカナダで苦勞して集
められた資金は、戦前において日本のWMSへ
のカナダ本部からの最後の多額な寄付となった。
支援獲得の成功は、少なからずコーテスの粘り
強さによるものであった。

テーマⅡ。—海外留学の推進— 次世代の女性リーダー育成をめざす

1930年代のコーテスの書簡に反映されていた
ふたつめのテーマは、日本人女性に留学のため
の奨学金を提供する熱意であった。実は早い段



「財団法人 東洋英和女学校書類」(左 申請前の下書きか?)
「財団法人設立許可申請書」(右)
代表者名 コーテスとなっている

階からWMSは、卒業後宣教のために活動する
ことが期待できる生徒に支援をおこなっていた。
かつて援助した生徒には、学校の教師になるか、
ミッションや日本のキリスト教教会にとって重
要な役割を果たす女性伝道者になることが期待
された。1940年5月、本部に送ったWMSが支
援した生徒・学生のリストには、青山女学院神
学部5人、東京女子大学2人、聖路加病院2人、
東洋英和幼稚園師範科11人の合計20人の名前が
記されていた。

東洋英和女学校の生徒への奨学金の原資は、
アメリカの一流大学であるイェール大学とコロ
ンビア大学を卒業し、東洋英和の卒業生の夫で
もある木下英太郎による一連の寄付で拡大され
た。1929年の10,000円の寄付に続き、木下氏は
東洋英和設立50周年を祝うさらなる10,000円を
寄付した。彼はハミルトン校長に宛てた1934年
11月の手紙の中で、自分はオハイオ州のカントン
で有名な電気掃除機の会社社長であるW. H.フー
バー (W. H. Hoover) 氏に世話になり、キリス
ト教の慈善活動を目にし個人的に恩恵に浴して
きたと書いている。木下奨学金は「1年に1人
か2人、道徳的精神が強く、知的資質が優れて
いると評価された東洋英和女学校の生徒」に授
与することにされた。木下氏は、ハミルトン校
長をコロンビア大学の卒業生として、また優れた
教育者として大いに賞賛し、1940年までに合
計3回10,000円ずつの奨学金を提供した。

しかし、コーテスの書簡の中では、国内奨学
金よりも海外留学のための奨学金の話題が突出
している。WMSの援助により海外留学をした
日本人女性の人数はおそらく10人程度しかいな
かったと考えられるが、コーテスは彼らのこと

を気遣い、しばしば候補推薦書や、利用可能な金銭、学習のコースや旅行計画などについて書簡に記していた。1925年、日本の女子学生へのWMS奨学金（WMS Scholarships for Japanese Women Students）がカナダ合同教会の誕生と共に設置された。WMS本部が承認し、コートス書簡に記された決議によると、日本のWMSに任命された選考委員会は、健康、性格、適応能力、学力を基に候補者を選択するべきとし、委員会はカナダ留学の準備をする責任があり、奨学金受給者は帰国すると少なくとも2年間はWMSのために働くことが求められていた。

WMS奨学金受給者たち

WMSは候補者の選定に注意を払い、彼女たちが海外でできる限りの経験を得るよう努力を惜しまなかった。合格者は日本で優秀な学歴を持ち、すでにキリスト教学校で教師として働いている人たちが多かった。早い時期の受給者である丸山民子は、1928年トロント大学で文学士（Bachelor of Arts）の学位を取得するために日本を出発した。1931年2月、学位取得に近づくと、コートスはWMSの教育委員会からの総意として、日本に帰国する前に、彼女にさらに教育学と宗教教育の機会を与えてくれるよう本部に要求した。その理由は、日本政府の法令が適切な資格を要求しただけではなく

「期待されている仕事の観点からも教育的な考察が最も必要です」

とされた為でもある。結果として、丸山はコロンビア大学から修士号（Master of Arts in Education and Practical Arts）を取得し、5年間の海外留学を終えた。1933年7月に帰国した後、東洋英和の教員としての長いキャリアを開始した。



丸山民子（1941年）

丸山民子：
1934～1964年
東洋英和中高部教員
担当 英語

ある時には、過去の奨学金受給者に、2度目の海外留学の機会が奨励された。丸山に続き、福田はな^(注1)は、1932年にオンタリオ・レディー

ス・カレッジ（Ontario Ladies College）を卒業した後、日本に帰国し、山梨英和で音楽の教員として活躍した。1937年から彼女の名前は奨学金の候補者として再び現れる。コートスは1938年に彼女のさらなる勉強のために本部に支援を求め、交渉が1940年まで続いたが、結局国際情勢の悪化のため留学が延期となった。

奨学金の推薦は東京から離れている伝道部からも入った。北陸伝道部によって推薦された河内国^(注2)は静岡英和から編入し、東洋英和高等女学科で学んだ後、北陸伝道部で活躍し、1932年6月までに7年間の職歴を積んできた人物だった。1933年からトロントの合同教会のトレーニング・スクール（United Church Training School）で勉強をした（合同教会のトレーニングスクールは国内外の伝道奉仕を計画しているカナダの女性を教育させる施設であった）後1935年に帰国し、金沢での活動を再開した。

1934年6月24日にコートスは光明照子がカナダのニューブランズウィック州のマウントアリソン大学に留学することを推薦した。推薦書には彼女が東洋英和女学校と東京女子大学を卒業し、2年間東洋英和で教えていたことが記されていた。マウントアリソン大学卒業生のハミルトン校長からの紹介もあり、彼女は早速同年の秋からマウントアリソン大学で勉強を開始することができた。1935年からはWMSの奨学金を受け取った。1937年の卒業後、ロンドン大学のキングスカレッジ（イギリス）で教育学を学び、1938年から東洋英和女学校での教育活動を再開した。



光明照子（1934年頃）

光明照子：
1928年
東洋英和女学校高女科卒
1932～1946年
東洋英和女学校教員
1946～1977年
東京女子大学奉職
（1967年～短期大学学部長）
1976～1985年
東洋英和女学院院長

1935年、コートスはもうひとりの東洋英和の卒業生であり、山梨英和女学校と広島女学院で教えた赤木芳子の推薦書を書いていました。彼女は南メソジスト監督ミッションからの奨学金でテネシー州ナッシュビルのスカリット大学（Scaritt College for Christian Workers）に留学した。1934年に卒業した後、彼女は自費でコ

ロンビア大学に入学した。WMS正規の奨学金の受給者はもう決まっていたので、コーテスは「少額の奨学金でもいいから」と小規模な援助を要求した。赤木はWMSからの援助を受け、1935年にコロンビア大学から理学士（Bachelor of Science）を取得した後、1936年にミシガン大学から修士号を取得した。1937年の秋から東洋英和女学校に教員として就任した。彼女はハミルトンが校長の後任候補として名を挙げるほど優秀であったが、諸事情により実現は叶わなかった。



赤木芳子（1918年）

赤木芳子（松尾）：

1918年
東洋英和女学校高等科卒
1937～1944年
東洋英和女学校教員
1953～1965年
東洋英和女学院短期大学
奉職
(1958～1963年 英文科長)

1930年代後半、国際的緊張が高まるなか、それでも日本のWMSは海外に学生を派遣する機会を求め続けた。1936年9月には、コーテスは教会奉仕を計画している人々のためにさらに多くの国内外で使える奨学金が必要であると訴えた。日本のWMSの奨学金委員会は、海外留学であれば、大学の学位が取得できる学部教育、宗教教育の研修、教会での子どもや女性の活動の研修を勧めた。そして学生が日本を離れる前に、国内のカナディアンアカデミー（Canadian Academy）で必要な学習準備を行うことを奨励した。その例が早川とみこ（注3）であった。彼女はWMS奨学生として1938年夏にカナディアンアカデミーで英語を勉強した後、女性の育成と宗教教育をトロントとオタワ州で2年間学び、1940年に帰国した。

静岡伝道部から推薦された榎本愛子はコーテス書簡に現われる最後の奨学金受給者であった。



榎本愛子

榎本愛子：

山梨英和、東京女子大学卒。
静岡英和、山梨英和教員。
山梨英和学院副院長、福岡女
学院院長を歴任

1932年東京女子大学を卒業した彼女は1939年にカナダに出発し、早川と共に合同教会のトレーニング・スクールで勉強した。1941年6月に静岡英和で教職に就くため帰国した。

（注）

1. 福田はな：東洋英和女学校に4年間在学
2. 河内国：北陸学院に1年間奉職
3. 早川とみこ：詳細不明

テーマⅢ. 一開戦時に日本に留まる固い決意—
「この国とこの国民を愛し」、日本の宣教に全てを捧げる

〈1940年〉

前年の春、コーテスは賜暇休暇のためカナダに帰り、1940年の夏の終わりまで滞在を引き延ばした。しかし、9月6日に日本に戻ると危機的な状況に直面し、9日に書簡を書いた。同年4月に施行された宗教団体の結果、長い間議論されて来た日本のプロテスタント教会の統合が急務となっていた。統合は海外の教会組織が日本のプロテスタント組織に属さないことを意味し、この後日本のキリスト教教会は海外のミッションから財政的な援助を受け取ることができなくなった。キリスト教学校について、基督教教育同盟会（現在のキリスト教教育同盟の前身）が、外国人に代わり日本人が各部門の管理職に付くべきだと承認する予定であるとコーテスは書いていた。

コーテスは、日本のキリスト教教会は外国人宣教師たちに対して感謝の気持ちを充分持っている本部に断言した。

「結果がどうあれ、長年にわたる宣教活動が忘れられてしまったと考えてはいけません」

しかし、より多くの宣教師を日本に送るよという彼女の以前の要求からは明らかに反転し、宣教師の人員を削減する必要があるかもしれないと書いていた。日本メソジスト教会の監督であり、教会統一の支持者でもある阿部義宗は、翌日関西地域でのミッションの代表者たちを会議に招いた。WMSの代表として、コーテスは夜行列車に乗って大阪に行き、戻るまではカナダから持ってきたスーツケースを開いて中身を取り出す余裕もなかったと記している。

コーテスの本部へのその後の書簡には、高まっていく不安が窺える。9月25日、彼女は外国からの財政支援の受け取りと基督教学校での外国人の管理を禁止することが確定されたと報告した。10月18日には、前日に行われた皇紀二千六百年奉祝全国基督教信徒大会で日本の教会が統合する意図があることが宣言されたと記

している。コーテスはこのような決定に批判はしなかった。それどころか、彼女は日本のキリスト教組織の自立がミッションのかねてからの目的であることを本部に気づかせた。しかし、新体制が突然現れたことによる問題をコーテスは予想していた。移行措置として、彼女は小規模な幼稚園やバイブルウーマンに贈り物の形で支援金を提供することなどを提案し、ミッションの財産を日本の教会に売却するか譲渡させるかの許可を求めた。そして、三つの英和の学校規約の変更を認めるように本部を説得した。

日本を去らなければならない可能性は、コーテスにとって最大の心配事であった。

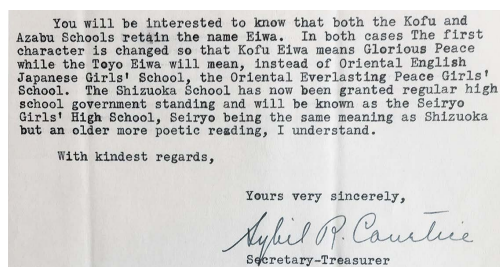
アメリカ人のメソジスト宣教師やカナダ合同教会の海外宣教局（BFM=Board of Foreign Missions）の男性宣教師とその家族が次から次へと帰国していたが、コーテスは通常どおり学校生活を継続し、日本人の同僚との関係は友好的で、そして阿部監督は少人数の宣教師を日本に残るよう励ましていると手紙で強調した。

1940年10月3日、日本在住のWMS宣教師の考えを聞いてきた本部に対し、コーテスは

「私たちは、合同教会が私たちに残ってほしいと表明し、そして政府が私たちの滞在を許可する限り、日本に滞在することを満場一致で決めました」

と返信した。

しかし、カナダ政府は彼女たちが日本に残る計画は危険性が高いと警告した。カナダ政府が10月24日にトロントの本部に送った電報には、「彼らの行動は気高いが、カナダ政府と彼ら自身にとっては危険です。コーテスさんと彼女の同僚たちに適切な助言をお願いします」と記されていた。



1941年3月5日の書簡末尾：三英和の校名変更（東洋永和、山梨栄和、静陵）の字義の説明をしている

(United Church of Canada Archives, Fond 505 Series 8)
(Acc. 83. 058c Box 73 File 15. Letter of Sybil Courtice)
dated 3/5/1941 to Mrs. H.D. Taylor.

11月7日、東洋英和のジェーン・キニー (Jane Kinney) とロイス・レーマン (Lois Lehman) を含む3人の宣教師が日本を離れる決意をしたと記されていた。残った我々は最後の警告まで残るつもりであるとコーテスは強調した。

〈1941年〉

1941年の早い段階で、危機的な状況となった。この時、カナダ合同教会所属の中で、たった8人のBFM（海外宣教男性ミッション）宣教師と3人の妻と比べ、WMS（婦人ミッション）女性宣教師は23人が残っていた。アメリカのメソジスト宣教本部幹事であった影響力のあるラルフ・E・ディッフエンドルファー (Ralph E. Diffendorfer) を含む訪問団は日本からの撤退を促した。しかし、阿部監督の支援もあり、コーテスは断固としていた。

1941年1月30日WMS本部の海外宣教部長テイラー夫人 (Mrs. H. D. Taylor) に次のように書いた。

「私たち〔宣教師〕の多くはいつものように自分たちの仕事に従事しています。一緒に働いている多くの日本人はなぜ私たちが今、日本を離れなければならないのか理解できないでしょう。私は多くの仲間と同様に、カナダの本部はこちらの立場を考慮すべきだと感じています。私たちは、奉仕できる機会があれば、仕事を続けたいです。私たちはこの国とこの国民を愛し、ここで奉仕するよう神から召命を受けていると確信しています」

2月14日、合同教会のBFMとWMSは、カナダ政府を通して全ての女性の全面帰国と男性の早期の帰国を命令する電報を日本に送った。しかしそれでも、コーテスは簡単には動かなかった。再び阿部監督の葛藤を利用し、彼女はテイラー夫人に一連の手紙を送って決定に反論し、少なくとも数人のベテラン女性宣教師は残すべきであると懇願した。

3月1日付書簡によると

「全ての女性に帰国することを望むというあなたのメッセージに対して、私たちの悲しみと落胆をどう表現すればいいのかわかりません。それは私たちが予期しなかった打撃で、どう考えても私たちはまだひどく動揺させられています。・・・私たちの〔阿部〕監督は、戦争が起こった場合、私たちは帰国した方が良くだろうと言っていました。一方私たちに繰り返し、いつものよ

うに自分たちの仕事を続けて欲しいと願い、
彼はとても苦しんでいます」

手紙の追伸には、もし送金の困難さが呼び戻す理由であれば、給料なしでも続けたい仲間がいると書いた。また最後に、家族を持つ男性宣教師が日本から撤退しなければならないとしても、もちろんWMSの女性は残留する、と付け加えられていた。

「私たち最後に帰国する者たちは、若くも無経験でもなく、自分の身の始末は自分でつけられます。」

コーテスの要求は最終的に達成された。

1941年3月14日に本部は宣教師の数人が残る許可をコーテスに電報で伝えた。阿部監督に相談し、残ることに同意した6人を決定した。

ハミルトン、キャサリン・グリーンバンク(Katherine Greenbank)、アニー・マクラ克蘭(Annie McLachlan)は、三英和各校の担当として選ばれた。エラ・レディアード(Ella Lediard)は幼稚園の担当、メイベル・クラージー(Mabel Clazie)は社会事業の担当になった。

もちろんコーテス自身は、WMSの代表としてまた伝道担当として日本に残ることとなった。コーテスは残留が可能であるという名誉に感謝を表明した。

1941年の春と夏にかけて、困難な状況の中でコーテスは通常の活動について報告し続けた。学校の入学者数、東洋英和の理事である清水由松の77歳の誕生日を祝ったこと、ハミルトンが東洋英和女学校高女科の修学旅行でいつものように日光に行ったこと。7月には、前月、日本基督教団が結成されたことを報告した。9月28日には、東洋英和の新たな校長である脇山司家太の任命について語った。10月16日の手紙の最後の部分では、東洋英和は翌年に二人目の英語教師が送られることを望んでいると書かれていた。

1941年12月8日の戦争勃発時、日本には残ることを決意した6人のWMSの女性たちがいた。

終わりに

1942年6月、ハミルトンを含む3人の女性宣教師が交換船でカナダに帰国した。コーテス、グリーンバンク、クラージーの3人は、東京郊外の捕虜収容所でもう一年を過ごし1943年の夏に本国に送還された。

東洋英和でのコーテスの教育活動は音楽教師として過ごした2年間に限られるため、おそらく彼女は東洋英和女学校の長いキャリアを持つ宣教師ほど知られてはいない。しかし、彼女と東洋英和との関わりは長くしかも緊密であった。彼女は戦前戦後に理事として務め、日本での滞在期間のほとんどを学校近くの西洋教師館で過ごした。最も重要なことは、コーテスは日本ミッションの総主事として1930年代に三つの英和女学校の確立に努めた。また彼女は戦争に至る困難な時代を通し、日本におけるWMS活動を導いた。そして戦後直後には、WMSと東洋英和の関係を再び繋ぐ努力をおこなった。筆者はコーテス書簡を読んでこれらの働きを知り、驚きとともに深い敬意を覚えたものである。

コーテス書簡は日本でのWMS宣教活動を理解する上で貴重な史料である。コーテスと本部との往復書簡は、宣教の目的や運営方法、宣教活動の詳細を私たちに教えてくれる。そして何より、コーテスと長い宣教活動を行なったその他のWMS女性たちの忍耐強さ、宣教師としての責任感、そして全身全霊をささげた献身を明らかにする史料である。

今回の「史料室だより」特集の執筆にあたっては、国際基督教大学大学院生である郷戸夏子さんに翻訳、学院史料室の酒井ふみよさん、松本郁子さんに翻訳のチェック、内容の確認、画像の用意をお手伝いいただきました。感謝申し上げます。

(Patricia Sippel 本学特任教授)

太平洋戦争開戦時に日本に留まっていたWMSの6人の宣教師たち



ハミルトン



グリーンバンク
(山梨英和学院提供)



マクラ克蘭



レディアード



コーテス



クラージー
(写真不明)

〈資料紹介〉 31

『初期スクラップブック』

鈴木 陽子

縦30cm、横25cmのスクラップブック、表紙をめくると、見返しには楓の模様が刷られており、スクラップブックといえども、とても豪華で立派な冊子であることがすぐにわかりました。このスクラップブックには、1889年から1938年までの様々なものが貼られており、79ページにわたる全体に目を通すだけでも、小一時間要しました。書き込まれた筆跡などから、おそらく15代、17代校長を務めたハミルトン先生が作成したものではないかと思われまます。実際に手に取ってみると、ここに刻まれた約50年間の歴史の重みを改めて感じ、感慨深いものがありました。その内容の一部を年代順に紹介します。

最初のページに貼られていたのは、ブラックモア先生時代の4階建て木造校舎の写真です。続いて、1889年閉校式のプログラムがありました。下級生向けの午後の部と上級生向けの夜の部と2回行われた修業式の様です。プログラムには、英語と日本語の両方が印刷されていました。

1902年3月27日に行われた卒業式の式次第には、「君が代」の斉唱が明記されていました。この慣習は、戦争が終わるまで続いたようです。

1909年、ブラックモア先生の時代に創立25周年のお祝いをしていたことがわかりました。これ以降、5年ごとにお祝いをするのが慣例となっていたようです。

差出人が「西洋教師一同」となっている1909年のクリスマスカードがありました。生徒一人ひとりに送られたものなのでしょう。

1919年に行われた体操競技会のプログラムには、たくさんの種目が明記されており、幼稚園児から高等女学科の生徒までが一緒に楽しんだことが伝わってきました。「デッドボール」というのは、今でいう「ドッジボール」のことなのかもしれません。

1919年、上田から保姆養成所が東洋英和女学校に移ってくると、翌年1920年の卒業式プログラムには、「保姆養成科」の卒業生の名前が記されていました。さらに次の年である1921年の卒業式のプログラムには「幼稚園師範科」となっており、短期間の間に名称を変えながら幼稚園師範科が設立されたことがわかりました。

所々に貼られた当時の先生方の写真を見ると、ほとんどが女性の先生であり、宣教師の先生を始めとする女性の先生方がリーダーシップを発揮して学校を運営していたことがうかがえます。



高等女学科教職員

1928年の高等女学科の卒業生の中には、のちに院長となる光明照子先生がいらっしゃいました。東洋英和は、卒業生がのちに母校の教師となることが今でもよくありますが、この頃は、特に優秀な卒業生にはWMS（カナダ合同教会婦人ミッション）が援助して留学経験、学位取得をさせることで、将来の東洋英和を担う人材を育てていた仕組みがあったようです。

1929年にカナダと日本の国交が樹立すると、東洋英和とカナダとの結び付きがさらに深まりました。1930年の2月には、駐日カナダ公使であるマーラー閣下が来校され、そのことが当時の新聞にも報じられていました。3月の卒業式のプログラムにはマーラー閣下が出席の予定となっています。

1930年の文芸会は日本青年館で行われ、1931年の卒業式は麻布教会堂（現鳥居坂教会）で行われていました。新校舎が完成するまでは、たくさんの人が集まる行事のたびに、広い場所を借りていたようです。

1932年6月12日は「フラワーデー」のメモがあり、小学科・女学科共に子供の日礼拝が守られていました。一緒に「子どもの日のうた」を歌い、村岡花子さんの話を聞いています。

1933年3月には、講堂落成式と卒業式が同時に行われ、5月には新校舎の落成式、そして祝賀バザーが行われました。バザーの入場券からも当時の祝賀ムードの雰囲気を感じます。手土産には、新しく定められたばかりの校章が印されたビスケットがふるまわれたようです。また、この年の11月にはカナダ合同教会婦人ミッション宣教50年のお祝いがあり、そこでは聖歌隊の賛美が捧げられていました。この年は特に、東洋英和にとって大きな喜びの一年となりました。そしてこの年から、今も続く追悼記念日礼拝が始まりました。第1回目のプログラムには、たくさんの先生方や卒業生の名前が書き連ねられ、その年だけでなく、それまでに天に召された東

洋英和に関わる方々のために祈りが捧げられたようです。その最初の方にはやはり、クレイグ先生のお名前がありました。今も大講堂にその名が残るクレイグ先生を特別に覚えて追悼記念日礼拝が始まったことを物語っています。

東洋英和には、創立当初からの数多くの資料や記録がたくさん残されており、そのおかげで、先生方がどのような思いでこの東洋英和を守り受け継いできたのかを、私たちは垣間見ることができます。これだけたくさんの資料が残された背景には、戦時中に校舎が焼けずに守られたことがあります。しかし、それだけではありません。このスクラップブック一つをとっても実に49年もの間、歴代の校長先生に引き継がれて詳細な記録が残されていき、そして学院の歴史の節目には、記録をまとめた記念誌が発行されていきました。

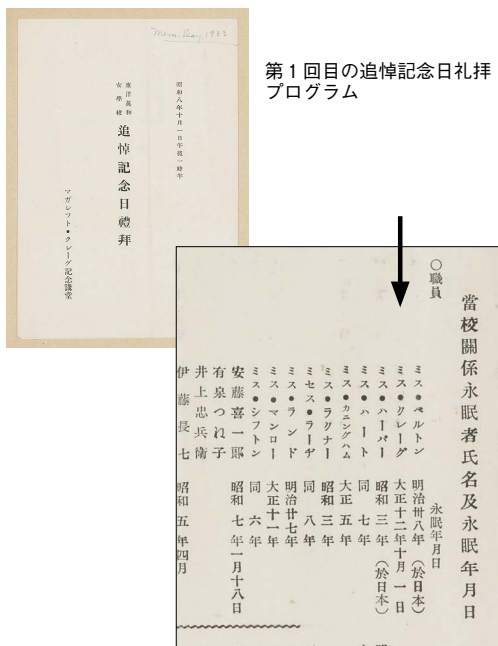
一人ひとりの先生方が几帳面に記録を残してくださり、さらにそれをまとめる作業を繰り返すなかで、私たちは東洋英和の長い歴史を詳細に知ることができるようになったのです。この膨大な東洋英和の歴史は、かつて東洋英和で学んだもの、現在学院で学ぶものや教えるもの、さらにこれから東洋英和に連なるものにとって、大きな財産となっています。今回このスクラップブックにふれ、長い歴史を物語るこれらの資料を今後も大切に継承する意義の大きさを実感すると共に、現在の東洋英和についての詳細な記録を丁寧に残していくことの重要性を改めて感じました。私たちの愛する東洋英和をいつも守り導いてくださる神さま、そして今までのすべての先生方や生徒、支えてくださった方々のお働きに感謝いたします。

（すずき ようこ 小学部教諭・史料室委員）

☆展示のお知らせ：

現在、本部・大学院棟において「初公開！校長室のスクラップブック —1889-1938 東洋英和のあゆみ—」と題して、この初期スクラップブックを展示・紹介しています。

（2018年3月24日まで）



1934年までの東洋英和関係者召天者名簿の冒頭2人目にミス・クレイグの名が記されている

〈思い出の先生がた〉34 藤原（倉田）美沙先生

生徒たちの憧れの先生

鈴木 齊

「倉田先生に拾って頂き、声を掛けて貰うために、わざと先生の前を歩いてハンカチを落とす生徒がいるのよ」私が教師になった頃、同僚からうかがったエピソードです。

そこで、生徒の憧れは教育者としての姿勢・女性としての生き方から生まれたに違いないと、直接指導を受けた卒業生にうかがってみました。すると「英和生に優れた理数教育を施したい。そして理数系を学べる大学・学部へ進学させたい、との強い意志を持って英和の教壇に立たれていた」との印象を語っています。

先生は、女性も理系の分野で活躍をすべき時代だと、現代で言う理系女（リケジョ）の誕生を望み、生徒への願いと教師としての使命を述べておられたのです。

教員時代は独身を通されました。自分らしく生き、仕事に専念し、当時女性ではまだ珍しかったゴルフやスキーを楽しみ、同僚とドライブを楽しんでいる姿に、生徒が女性の生き方のモデルを見、憧れの思いを抱いたのも自然のことだと思います。野尻湖での水泳では日本泳法を披露され、和船を漕ぐのもお上手でした。その上、竹を割ったような真っ直ぐな性格で、怒ると大変怖かったようでもあります。なんでもできて、男性的な面や強さも持っておられる先生でした。

もう一つ、生徒たちに大変上手な絵を添えたハガキを送っていらしたことが分かりました。今で言う「絵手紙」です。「絵手紙」というものを人々が認識したのが1978年頃と言われていきますから、彼女は先駆者となります。手紙に絵を添える。その絵が素晴らしい。絵心がおありになる。そこで色々お聞きしたら、明治期の日本画家・橋本雅邦のお孫さんであるとのことでした。そのことをご存知の同僚はほとんどおられなかったのですから、口にはされなかったのでしょうか。

中学部部長に就任された1981年は、創立100周年を迎える3年前でした。翌年には中高部校

舎の改築という大事業が始まり、先生はヴォーリス建築の伝統を継承する校舎の建築を強く望んでその実現のために奮闘されました。一方、教育課程をコース制に改定し、念願であった理系女誕生の道を太くされました。

1984年11月、教員室

に配られた招待状で私どもは藤原氏との結婚を初めて知りました。銀座教会での挙式では多くの方々に祝福され、少女のようににはかんだ姿は、学校では見ることのできなかつた先生でした。そして結婚された翌年3月に英和での教員生活を閉じられたのです。「教師として、部長としてやるべきことはやり終えた。これからは藤原氏との生活に全力を向けたい」という強い意志が伝わって来ました。それは、医者である藤原氏が往診していた老人ホームに度々同行され、ご主人に「ホームの方々は、私ではなく、君を待っている」と言わしめたことが物語っていると思います。

2016年2月21日91歳の生涯を全うされ、天に召されました。

（すずき ひとし 元中学部部長）



藤原美沙先生

藤原美沙（ふじわらみさ）先生

一略 歴一

1924年	7月27日（現在の）文京区に生まれる
1945年	東京女子大学数学専攻部卒業
1946年	東京私立山崎学園富士見高校奉職 （～1957年3月）
1957年	東洋英和女学院中高部に奉職（数学科）
1981年	同 中学部部長に就任
1985年	3月 退職
2016年	2月21日 永眠（享年 91歳）

史料室の活動より (2017年4月～9月)

(☆は複数回の事項)

- 4月・案内一(1日) 新任者辞令交付式後、新任者へ学院の沿革を話す
- ・展示替え一「旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ」終了、「宣教師と村岡花子② ミス・ブラックモア」拡大
 - ・来室一卒業生 ミス・カートメルの手帖読み起こし経過報告
 - ・講義一大学1年生フレッシュマンゼミにて「史料室所蔵資料にみる英和生のあゆみ」3回
 - ・来室一大学院生と指導教授 論文作成のため、史料室資料の利用法の相談
 - ・展示コーナー見学一カナダ映画「赤毛のアン」出演者。高校生が解説
 - ・照会一1932年卒の山口喜久子さん(芸大に進学)はピアニスト小倉末子氏にピアノを習ったか? →不明
 - ・打ち合わせ一出版文化社と資料分類の考え方について
 - ・照会一宮城春江氏の東洋英和理事在任期間 →1951.5～1953.5、1976.4～1977.3
- ☆資料閲覧一大学院生
- 5月・来室一大学院図書室職員より、リポジットに「史料室だより」から何編かを載せたいという提案
- ・来室一大学院生 高碓達之介氏の業績研究につき資料調査 →後援会寄付委員会役員でご息女が1965年卒と判明
 - ・照会一恵泉女学園図書館員より旧職員中木美智枝氏の英和での資料。帝国図書館初の女性司書だったことが判明
 - ・広報誌「ザ・AZABU」No.39刊行(展示コーナーの紹介が掲載される)
 - ・「史料室だより」No.88 刊行
 - ・照会一人事課より 故今関公雄先生の短大時代のご専門は? →「社会福祉」
- 6月・講演一同窓会総会後の催事にて「英和写真館一英和生のおしゃれと学校生活から」
- ・来室・見学一実践女子大学図書館向田邦子文庫担当者2名
 - ・照会一管財課より 英和の過去の寄付に関する資料 →後援会ファイル貸出
 - ・照会一日本甜菜(てんさい)製糖株式会社より「牧山清砂」氏について →おそらくご息女が1932年卒の牧山露子氏。
 - ・来室・打ち合わせ一追分宿郷土館学芸員、村岡姉妹と。「村岡花子と軽井沢」展のため、貸出資料の振り分けなど。→画像提供11点
- ☆展示コーナー見学一フェリス女学院史料室のスタッフと清水建設の方2名
- ・照会一練馬区みどりのまちづくりセンター所長より 戦前「花岡学院」に東洋英和の小学部が林間学校として来ていた。
- 6月・打ち合わせ一出版文化社と仮分類の検討
- ・照会一中高部教諭より、野尻キャンプの1973年1974年のしおりを見たい。→所蔵なし。他資料より1974年のプログラムをコピーして提供
 - ・照会一外国の方を展示コーナーにお連れする予定。展示コーナーに英文表記はあるか。→なし(今後の検討課題とする)
 - ・第1回史料室委員会開催
 - ・「ザ・AZABU 麻布の軌跡」村岡美枝氏取材のサポート
 - ・来室一大学教授 英和とアメリカとのつながりは? →グルー大使と齋藤実夫妻との交流などを紹介
 - ・来室一大学職員 大学の写真の記録の史料室への提供について
- 7月・来室一卒業生 史料室見学
- ・来室・見学・懇談一山梨英和より事務局長、担当の先生がた 山梨英和史料室開設にあたり、諸々の相談
 - ・来室一大学元職員 史料室所蔵古写真の閲覧
 - ・資料搬出一追分宿郷土館「村岡花子と軽井沢」展貸出しのため 資料35点
 - ・出張一ハミルトン&ハード軽井沢コテージにて、見学と掃除 12名参加
 - ・来室・調査一立教女学院短期大学准教授 保育日誌の閲覧
 - ・出張一全国大学史資料協議会研究会「ガラス乾板の資料学」
 - ・画像提供一朝日新聞 津総局へ 新刊紹介記事のため 片山廣子画像1点
 - ・来室・調査一オックスフォード大学学生 明治一昭和期の女子教育に関して
 - ・来室・懇談一大学特任教授 カナダ合同教会アーカイヴズでの調査の話
- ☆校閲一「Kaede Magazine」Vol. 14ビジュアル歴史館 3回
- ☆来室・相談一卒業生。宣教師の資料収集について
- 8月・打ち合わせ一出版文化社と分類の検討(第2回)

- ・来室一卒業生「史料室だより」〈思い出の先生がた〉34の資料集め
- ・画像提供—東京書籍へ『昭和の男』（半藤一利・阿川佐和子対談）のためヴォーリス校舎と階段の画像2点
- ・展示コーナー見学—同志社女子中学校・高等学校文芸部員約40名・顧問2名東洋英和の文芸部員・顧問が案内
- ・照会—GHYより 故佐々木みよ子先生の所属学科 →短期大学英文科
- ・来訪・展示コーナー見学—フェリス女学院事務局長・資料室長
- ・展示コーナー見学—成城学園中学校・高校文芸部の生徒4名・顧問2名 村岡姉妹が解説
- ・見学（ヴォーリスの意匠）—大学教授、友人3名
- 9月・来室・見学・実習—大学教職課程の4年生3名と指導教官
- ・第2回史料室委員会開催
- ・展示コーナー取材—港区KISSポート財団 広報誌掲載のため
- ・画像提供—芹野与幸氏へ 小学部修学旅行生への講演のためヴォーリス関連数点
- ・資料返却—東映よりグリーンゲイブルスジオラマ
- ・来室—村岡美枝氏 展示用資料お届け
- ・展示替え—「宣教師と村岡花子② ミス・ブラックモア」終了、「村岡花子文庫書齋のなかの宝もの」[初公開！校長室のスクラップブック 1889-1938 東洋英和のあゆみ]開始（英語キャプション併記開始）
- ・見学—静岡文化芸術大学学生 13名
- ◇院長就任式にて、カートメル[®]の聖書が宣誓に使用される

史料室所蔵資料の目録化作業報告

逐次刊行物の目録作成「敬和会」「英米文学研究」など、目録の分類項目の検討、資料ファイル再編成など

主な寄贈資料

- * 村岡花子文庫追加 詩稿（林 芙美子）、色紙（今井邦子）、赤毛のアンの絵
- * 『ヒルダさんと3びきのこざる』むらおかみえ訳 徳間書店
- * 『最後のロシア大公女マリーヤ』『リンカン上・下』『ヴィクトリア女王 上・下』平岡緑訳（卒業生）中央公論社
- * 『日あたりっぱ大ゆれ』勝田紫津子作（卒業

生）大日本図書

- * 『電子メディアは研究を変えるのか』倉田敬子編（卒業生）勁草書房
- * 『遺句集 若竹』沢田英彦著（元事務長）東都新聞社
- * 『エサルハドン王位継承誓約文書』渡辺和子著（本学教授）リトン
- * *A Heart at Leisure from Itself—Caroline Macdonald of Japan* by M. Prang UBC Press
- * 『カナダの歴史を知るための50章』細川道久編著 明石書店
- * 『昭和の男』半藤一利・阿川佐和子対談 東京書籍
- * 『燈火節』片山廣子著 暮らしの手帖社（初版）
- * 「ことたま」1979.6・7、1980.1月号
- * 「東洋英和ニュース」製本、「小羊」2-4号
- * アルバム、プリント写真
- その他 他大学年史・紀要など多数

購入資料

- * 『近代日本のキリスト教と女子教育』キリスト教史学会編 教文館
- * 『写真技法と保存の知識』ベルトラン・ラヴェドリン著 青幻舎

<お知らせ>

- * 学院資料・村岡花子文庫展示コーナー 現在開催中の企画展(会期中入れ替え有り)
「村岡花子文庫 書齋のなかの宝もの」
「初公開！ 校長室のスクラップブック —1889-1938東洋英和の歩み—」
期間：2017年9月27日～2018年3月24日

* 史料室では、学院の歴史や学生生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがありませんでしたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の著作も収集しています。

【史料室ホームページ】

<http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives>
「史料室だより」は史料室ホームページの「史料室刊行物」より全号閲覧いただけます。

【お問い合わせ先】

東洋英和女学院史料室（法人事務局内）
Tel.03-3583-3166（直） Fax.03-3583-3329
E-mail：archive@toyoeiwa.ac.jp